

「喜一憂」

No. 21

「喜一憂」

情況の変化に喜んだり、心配したりすること

藤屋 侃士
下松市幸ヶ丘

「喜一憂」最終回

本紙に「巡礼への道」「喜一憂」を連載中の藤屋侃士さんが11月16日に亡くなりました。連載の終了にあたって、家族の方からの寄稿を掲載します。
(編集部)

感謝とともに

「寛容とは、世界の文化の豊かな多様性、表現方法、人間としてのあり方を尊重し、受け入れ、感謝することです。」
「寛容とは、世界の文化の豊かな多様性、表現方法、人間としてのあり方を尊重し、受け入れ、感謝することです。」

11月16日は、国際寛容の日。人々は分断ではなく団結すべきであるという考えに基づき、文化や信条の違い、文化や信条の違い



大学時代の親友からの花



書斎の押入の原稿ファイル



藤屋さん 取材に出かけたり、孫が留学体験と一緒に書いたり、原稿執筆は家族と共にあった。

11月16日に藤屋侃士は81歳でこの世から旅立っていった。旅立ちの日。それが、私たちに残された者へのメッセージだったのかもしれない。

2006年4月から日刊新南に「巡礼の道」の執筆を開始し、ライフワークとなった。書斎には第1号からすべての記事がファイル

取材に出かけたり、孫が留学体験と一緒に書いたり、原稿執筆は家族と共にあった。今年1月からは「喜一憂」として月2回の連載となったが、5月27日の記事でお伝えした通り、入院してからは家族でエピソードを書きつないできた。12月末で連載は終了したいと、日刊新南には伝えていたが、連載が励みになるのならば考えてほしい、との温かいことばをいただき、11月25日掲載予定の記事の受け渡し日も決まっていた。

2019年末の記事には、ラオスに行き、新型コロナウィルスの蔓延が落ち着き、10月中旬から週1回の面会も可能になり、限られた面会時間ではあるが家族との会話も楽しみ、亡くなる前日も妻や娘とことばを交わした。最期は妻の声を聞

こえると心拍数が増え、家族には苦しみなど見せず、穏やかに息を引き取った。病室では最期の時間を家族で過ごすことができ、多くの病棟スタッフが見送りに来てくださった。病院のみなさまにも感謝したい。

葬儀が終わるまで、一度も白い布を顔にかけることなく微笑んでいて、また目を覚ますのではないかという気持ちにさせられるほど

この季節の旅に出る時に着ていたベージュのジャケットを羽織って、冬物の帽子を携え、夏の帽子と自分の家族構成と同じ両親ゾウと小象3匹の模様の入った半袖シャツも持って、「巡礼の道」の記事のコピー、マザー・テレサのことばとともに、大好きだったカサブランカの花に囲まれて、笑顔で旅立っていった。一足早く出かけていったので、私たちが到着したときのために、取材を続けていることだろう。

通夜と葬儀では、「巡礼の道」543号の記事と共に、本人を弔った。その記事の最後にあったマザー・テレサのことばを、みなさまへ感謝の気持ちとして伝えたい。

わたしたちは愛するために、そして愛されるために生まれてきたのです。マザー・テレサ

ホームページに「巡礼の道」「喜一憂」を掲載しており、自由に閲覧できます。「ふじやかんじ 巡礼の道」で検索してください。